

爛春

激しい南風が窓を揺らしている
焦燥にはためく洗濯物が影を暴れさせる

(シューベルトのピアノ・ソナタ)

生から最も遠くに身を置いた傍観者にとって
死ほど無意味なものはない筈であるのに

(私はこの季節を怖れている)

紅のさした陰核のような無数の蕾に
ぬるい風が生臭いエキスをぶちまける

自暴自棄に憧れる絶望的な自我
ひたすら堰き止めることを命じられた自我

乾いた、ばさばさと叩く音
追い立てるように、間断なく――

何事も起こらぬ、という相貌をして
何食わぬ顔で止めを刺す者

あとわずかで、ちぎれる
ああ、拗ぎ取られてしまう

(私はこの季節を怖れている)

(2010.3.20)